

# 李退溪「天命図」の人間観

李 致億（倫理文化研究センター特任研究員）

## はじめに

本稿は、朝鮮時代の儒学者李退溪（1501-1570、名：滉）の「天命図」を分析することによって、その人間観、つまり儒学では人間をどのような存在として受け止めているかを把握することに目的がある。「天命図」は朱子学の理気論に基づいて天と地、自然と人間の有機的な関係を探ろうとした一枚の図である。その内容については本論で詳しく述べることにするが、厳密に言うと「天命図」は李退溪の独自の著作ではない。「天命図」はもともと鄭秋巒（1509-1561、名：之雲、字：静而）によって作成されたものであり、李退溪は彼の依頼を受け、その図に修正を加えただけである。それにもかかわらず、学界では「天命図」を李退溪の著作、または李退溪と鄭秋巒の共同著作として公認している。それは「天命図」が李退溪によって大幅に修正され、鄭秋巒の原図から大きく変わったためであると思われる。

過去の儒学者たちはしばしば哲学理論を簡単な図で表した。代表的なものとして周濂溪（1017-1073、名：敦頤）の「太極図説」が挙げられる。「太極図説」は、宇宙の根源である太極から万物が生成・運行されるプロセスを一枚の図解に圧縮した力作である。宋代、朱子学が発達して以来、図説の作成が頻繁になった。朱子学を継承した学者たちは、複雑で難解な朱子学の理論を自ら理解するために、また効果的に説明するために図説を作ったのである。朱子学の創始者である朱子も自分の哲学理論を図説として著述したこともある。代表的なもので仁の概念を解釈し、それを図式化した「仁説図」がある。以降、特に元代の朱子学者である程林隠（名：腹心）は朱子学の理論と自分の学説を活発に図説として披露している。

韓国では朝鮮初期の権陽村（1352-1409、名：近）の図説が有名である。権陽村は「天人心性合一之図」・「天人心性分積図」・「大学指掌之図」・「中庸首章分積図」など、儒学の重要な概念を図説でまとめた。権陽村の図は、後日、合計 40 種類が集められ『入学図説』という 1 冊の単行本として刊行された。このような風土の下で李退溪は、彼の代表作である『聖学十図』を著すようになるが、これは李退溪が亡くなる一年前の 1569 年のことである。『聖学十図』は、10 枚の図と、それに対する簡単な説明で構成されているが、その中に儒学思想の精髓がすべて含まれているものと評価される。これに先立ち、『聖学十図』の序論に当たるとされる「天命図」が制作されるが、これは『聖学十図』が出版される 16 年前の 1553 年にさかのぼる。「天命図」の制作は、朝鮮の学術史上最も有名な事件の一つである四端七情論争の発端となり、後日『聖学十図』編纂の淵源となる。

「天命図」は朱子学の世界観と人間観、さらに倫理の問題までもを圧縮的に内包している図説である。本稿では、まず「天命図」の制作経緯とその内容を紹介した上で、そこに現れた人間観を解釈してみることにする。